



## 「学生を育てる」FD活動を！



大学教育総合センター長  
(副学長・理事)

鈴木 邦雄

4年前の法人化以来、国立大学とその教職員に求められる責務について多くの議論がなされています。大学に対しては、中期目標・中期計画と連

動させたアドミッションポリシー(大学が求める人材像, 目指してほしい人材像)を明示し, 「学生を育てる」ことの推進が前面に出されています。また, 教員に対しては, 学術貢献という研究の実績を反映させた教育, 地域連携, 社会貢献・国際貢献として大学運営への貢献が求められています。

この流れを裏付けるものとして, 平成17年度の中教審答申では, 教育の実質化(教育の課程の組織的展開の強化)が提言されています。昨年改正された大学院設置基準でも, 教育の質の向上(授業及び研究指導の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究の実施)がうたわれており, FD活動の組織的な推進を求めています。FD活動の義務化です。さらに, 本年度に入ると中教審・小委員会報告において「学士力」の概念が出され, 入学時だけでなく, 「出口(卒業時)」の学生の質も要求しています。教員は, 自らの学術研究に努力することを基盤とする教育に加えて, 正課内外において「学生を育てる」という役割も求められてきています。このような教育の実質化は, 知識基盤社会が求めていることであり, その一方で, これまでの大学教育が必ずしも重視してこなかった反省があります。

横浜国立大学においては, 「学生を育てる」こと

## 目次

1. 「学生を育てる」FD活動を！
2. 部局におけるFD活動の紹介
  - ・ 経済学部FD活動報告
  - ・ 工学部FD活動報告
3. 平成19年度FD合宿研修会報告
4. 愛媛大学「FDスキルアップ講座」参加報告
5. 速報 平成19年度前期授業評価アンケート実施報告
6. FD推進部より

の重要性を認識しており, 平成19年度の新入生から『キャリアデザイン・ファイル』を配布し, 自己理解, 自己形成, 社会活動, 就職活動などのキャリアデザインをポートフォリオとして記載することを求めています。このファイルは, 学生に対してキャリアデザインのツールを提供するものであります。また, 学生による授業評価も継続しています。学生の自主性に任せるとか, 評価が教員に伝えられるだけでは十分な効果・改善をもたらしません。教職員と学生とのコミュニケーションや組織的な授業改善への取り組み, キャリア教育との連携などがあつて効果を生むものです。

したがって, 卒業時に学生がどれだけ知識・能力を修得できたか, 自己形成ができたか, すなわち出口で学生の質を保証するためのものとして, 学生による授業評価の有効活用, 教職員と学生とのコミュニケーションを深めるなど, FD活動の推進が必要となっています。逆に言えば, 「学生を育てる」ことを主眼に置き, 学生の修学効果の向上に直接結びつけた「教員の授業内容と方法の改善」と「キャリア教育」の推進をお願いしたい。

## 部局におけるFD活動の紹介

### 経済学部FD活動報告

国際社会科学研究所・村上 衛  
国際社会科学研究所・Craig Parsons  
(クレッグ・パーソンズ)  
経済学部・Steve Hoffman  
(スティーブ・ホフマン)

#### 経済学部の講義紹介

経済学部においては、専門科目においても、国際化に対応した講義の展開が進められている。今回のニュースレターでは、その中から平成18年度ベストティーチャー賞を受賞されたパーソンズ准教授と、特色ある特殊講義「英語によるアカデミックコミュニケーション」を行っているホフマン講師にそれぞれ講義の内容や方法を紹介していただいた。

#### フィードバックの重要性（パーソンズ准教授）

本年、ベストティーチャー賞をいただき、とても名誉に思うと同時に驚いております。なぜなら、経済学部には他に多くの優れた先生方がいらっしゃるからです。私の講義のスタイルは、本学部の他の教員とさほど違わないと思います。ただ、幾分「アメリカ流」で、通常の日本の講義よりも、学部と大学院の両方で、一学期間に比較的多くのテストと成績に反映する宿題を課しているかもしれません。正直なところ、これは学期を通じて学生と私の作業量を増やしますが、学習プロセスにおいて重要な部分だと思います。とりわけ、経済学においては、概念・モデル・グラフを正確に理解するために、一人机に向かい問題を解くことは重要です。それによって学生の能力向上に関して必要なフィードバックを得ますし、そうすることによって彼等の理解の欠落を補い、彼等が見落としと思われるポイントを再度強調することができるのです。

概して私の講義のスタイルは標準的ですが、学部の国際関係論の講義では、出来る限りバイリンガルな講義を試みている点は異なっているでしょう。つまり、講義ノートの大部分は日本語と英語の両方で書かれていて、ある日には日本語で、別の日には英

語で講義を行っています。今日、我々の学生は英語の講義を英語で受ける経験をするのみならず、時にはその専門分野も英語で教わるのが重要だと思われます。この方法で、卒業時には世界中の人々とのいっそう洗練された対話を、よりよく準備することができるでしょう。

私はこの6年間、ここ横浜国立大学で学生たち、教職員の皆様と非常に楽しく過ごして参りました。国大は、その学生が多くのお機に気づき、それらの機会を利用すれば、非常に多くのものを提供してくれます。毎年、私は次の有望な学生たちがやってくるのを心待ちにしています。私は、彼等に経済学のすばらしさに対して少しでも関心をいただいてもらい、日本の外側の世界を少しでも提示することができればと考えています。

#### 効果的なプレゼンテーション（ホフマン講師）

2006年10月より、私は「効果的なプレゼンテーション」に関する学部の講義（英語によるアカデミックコミュニケーション）を横浜国立大学経済学部で開講しています。この講義の目的は、学術およびビジネスの世界の多様な状況において英語でより効果的なプレゼンテーションをするための幅のあるツールを学生に提供することにあります。これは今日特に重要です。なぜなら、多くの人々（ビジネスマン、エンジニア、科学者、学生、エコノミスト等々）が聴衆にいかにもメッセージを伝えるかを知らないために、プレゼンテーションにおいて多くの情報が失われているからです。

この講義では、よりよいプレゼンテーションへとつながる様々な技術に焦点をあてています。これら

の技術は、いかにプレゼンテーションを「計画」し、取り扱いたい重要なトピックが何であるかを明らかにするか、ということを含みます。同時にプレゼンテーションを向上させるためのいろいろな「視覚教材」をどうやって最も上手く使用するかといった議論にも時間を割きます。もう一つの重要な分野はプレゼンテーションの「切り出し方」です。そこでは、最初の段階で聴衆の注意をひき、注意を保ち続ける方策を講じる必要があります。「話し方」、特にメッセージを伝えるためにどうやって声やボディランゲージ、アイコンタクトを用いるかも、プレゼンテーション技術を改善するための最も重要な部分です。プレゼンテーションの「締めくくり」も、取り扱った題材を効果的に要約し、聴衆に彼等がこのプレゼンテーションから得て欲しいものを明確に要約して残しておくために重要です。最後に、プレゼンテーションに続く「質疑」の様々な運用方法について議論します。これには「すばやく対応す

る」際の特異な技術と能力を発展させることが必要です。

もちろん、これはプレゼンテーション技術を高めるための講義なので、学生が如何に行うべきかについて教員が話すことを単に聞くことによって学ぶことができる考えるのは意味がありません。ビジネス業界では「オンザジョブ・トレーニング(OJT)」と言われるように、「実践から学ぶ」のみです。したがって、本講義では学生は学期中に数回同じクラスの仲間の前で実際にプレゼンテーションを行うことにより、学んだものを実際に適用することが求められます。これは時に異なる目標(情報提供型・説得型など)をもつ様々なテーマについての講義を通じた、様々なプレゼンテーション(短時間、学期半ば、最終)を含んでいます。このような実践を通じ、学生は効果的なプレゼンテーションをする能力を徐々に向上させ、人前で英語で話すことへの自信を得ることができるでしょう。



## 工学部FD活動報告

工学研究院・高木純一郎

### 生産工学科非常勤講師懇談会

工学部生産工学科では、教育の一端を担っていただいて非常勤講師の先生方と意見交換を行い、学科教育の向上に資するため、毎年「教員と非常勤講師との懇談会」を開催している。平成18年度は平成19年2月19日(月)に開催し、主に専門科目を担当する14名の非常勤講師と生産工学科担当専任教員15名が参加し、学生の学習状況、問題点について率直な意見交換を行った。

今回の懇談会では、特に「授業で留意していること」と「学生の能力および学習意欲について」の2点について非常勤講師からの意見を述べていただいた。いただいた意見の主な内容は以下の通りである。

#### 授業で留意していること

- ・現実に製造されている材料と講義で教えている理論とのつながりを話すよう心がけている。
- ・プレゼンテーションを教えている。1年半たって学生は自分の立場が良くわかるようになった。

- ・座学ばかりでは理解してくれないので工場見学をしている。
- ・泥臭いところを理解してもらうのが自分の役目。
- ・グループに分かれてディスカッションをさせているがよその大学では珍しいようだ。グループによって活発さが違う。リーダーシップを持った学生がいるといないで大きく違う。グループの力を生かせるような試みをしたい。
- ・安全には厳しく指導している。5分遅れた場合は実習を受けさせない。しかし一度遅刻した学生はその後遅刻することはまずない。
- ・目的を明確にさせると意欲的になることが多い。今後はいかに目的を明確に教えられるかに注力したい。

#### 学生の能力および学習意欲について

- ・なぜ?を考えない学生が多い。基本原理がしっかりしていないと大きな失敗をする。
- ・コンセプトや知識の吸収は早いですが、考える力や計

算能力に問題あり。

- ・機械工学に興味のない学生もあり、いかに興味を持ってもらうかに注力している。
- ・実物がわかるように「教材」が置いてあるのにそれらを見ないで製図を書いてくる。モノの仕組みをよく観察し考える力がほしい。
- ・図面を書いたり読んだりする能力は他大学に比べて高いと評価している。しかし図面は書けるが内容は意外に理解していないようだ。
- ・基礎体力のない学生が多い。特に病気ではないのに実習の途中で休ませるような状況があった。
- ・提出期限を守らない学生が多い。期限までに持ってくるのは半分もいない。

#### その他

- ・教えている自分も勉強させてもらっていると感ずる。
- ・学生の夢を実現する一端を担えればと思っている。
- ・二部の製図を担当しているが勤労学生がほとんどいない。
- ・学生は夜中の2時3時まで起きていると聞いてお

どろいた。会社内ではメンタル面の問題と就寝時間との関係が強いと聞いているのもっと早く寝てほしい。

- ・若者と触れ合う機会をもらってうれしく思う。

一方、教員の側からは、以下のような非常勤講師に対する感謝の意見が述べられた。

- ・教員が教えられない分野の教育をしてもらうことは生産工学科では不可欠で、その点が高い学生の評価につながっている。
- ・教科書にないことを話してもらえることが有意義である。学生の興味も増す。
- ・学生に対する教育だけでなく技術職員の教育もしていただいている。職員の刺激になるという点で重要な役割を果たしている。

今回参加いただいた非常勤講師の多くは企業に勤務されている方であり、いただいた意見は企業・社会が望んでいる大学教育や学生像が反映されたものとして、大学側は真摯に受け取らなければならないものと感じられた。また、このような意見は、生産工学科にとどまらず、本学の今後のFD活動に大いに参考になるものと考えている。

## 平成19年度 公開授業「特色のある授業」のお知らせ

本年度も各部局から推薦いただいた教員の授業の公開を実施します。授業日のスケジュールは以下の通りです。どなたでもご自由に参観することが可能です。授業終了後の意見交換会にも、是非ご参加ください。

- ・科目名：「高分子化学Ⅱ」，担当教員：渡邊正義  
日時・場所：10月30日（火）3限・工学部講義棟・A106教室
- ・科目名：「法人税法研究」，担当教員：吉村政穂  
日時・場所：11月16日（金）1限・国際経済法学研究棟・101教室
- ・科目名：「初等生活科教育法」，担当教員：金馬国晴  
日時・場所：11月22日（木）5限・教育人間科学部講義棟・8号館106教室
- ・科目名：「鉄筋コンクリート構造・演習」，担当教員：田才 晃  
日時・場所：11月26日（月）1限・工学部講義棟・A305教室
- ・科目名：「経営学総論」，担当教員：松井美樹  
日時・場所：12月5日（水）4限・経営学部・106教室

※担当教員未定の部局につきましては、追って掲示等でお知らせします。

## 平成19年度FD合宿研修会報告

### FD推進部門 研修・シンポジウム ワーキング・グループ

#### はじめに

本年度より急遽FD推進部門長を仰せつかり、昨年度までの部門長であった種田保穂先生からの引継の際に、特に実行して欲しい旨要望があったのが「FD合宿研修会」の開催であった。そこで、今年度のFD推進部会の中に合宿研修を実行するためのワーキング・グループを作り、主査を小川輝繁先生（工学部）にお願いし、早々に内容についての検討に入った。時期は夏休み中とし、場所は八王子セミナーハウスに決め、さらに研修内容について検討した。他大学での取り組みを見ると、少人数のグループ分けをしたワークショップ型の活動が多いようであったが、今回は本学では初めての試みということもあり、できるだけ気軽に多くの教員が参加できるよう、「大学における良い授業とは？」をテーマに学内外から講師をお願いして、講義形式として実施することとした。また、研修の対象は主に若手教員としたが、本学の教職員であれば誰でも参加できるようにした。参加者募集の告知から締切までの期間が十分に取れなかったため、参加者を集めるのに予想外に苦労したが、研修後の参加者からの感想はおおむね好評で、一応の成果を収めることができたと考えている。ワーキング・グループ委員の先生方、また、裏方として本活動を支えてくれた教務課大学教育係の職員の方々に感謝したい。以下が、各委員からの実施内容についての報告である。

(杉村)

#### 合宿研修会の概要

平成19年度FD合宿研修会は、8月29日（水）～30日（木）の2日間、八王子セミナーハウス（財団法人大学セミナーハウス）で開催された。研修会のテーマは、「大学における良い授業とは？」とした。FD活動に高い見識をお持ちの5名の講師をお招きして、講演を聞いた後、参加者で意見交換を行った。参加者は、講師、FD推進部委員を含めて22名であった。プログラムは下記のとおりである。

#### 8月29日（水）

- 13:00-13:10 杉村秀幸FD推進部門長 挨拶
- 13:10-13:30 オリエンテーション
- 13:30-15:00 プログラムⅠ「なぜFDが必要なのか？」（講師）安岡高志氏（東海大学理学部化学科 教授）
- 15:10-16:40 プログラムⅡ「学生を育てる授業—アクティブ・ラーニングの多様性—」（講師）溝上慎一氏（京都大学高等教育開発センター 准教授）
- 16:50-18:20 プログラムⅢ「修己治人の意識を育むIDEAL授業」（講師）小田原修氏（東京工業大学総合理工学研究科 教授）

#### 8月30日

- 9:00-10:30 プログラムⅣ「米国における教育経験から見た良い授業とは」（講師）石原修氏（横浜国立大学工学研究院 教授）
- 10:40-12:10 プログラムⅤ「次世代型大学の良い授業—ナレッジマネジメントと参画教育の視点から」（講師）林義樹氏（日本教育大学院大学学校教育学研究科 教授）
- 13:00-14:30 プログラムⅥ「討論会」

8月29日のプログラム終了後、懇親会を開催して、講師と参加者の間で、交流を深めた。日頃交流の少ない異部局の教員が合宿を行って、学生の教育について議論し、交流を深めたことは非常に有意義であった。（小川）

#### 講演内容紹介

##### Ⅰ. 「なぜFDが必要なのか？」

東海大学理学部教授で同大学教育研究所所長の安岡高志先生から、標記の題目において、多くの具体的データを用いながら、今後大学が取り組むべき課題について講演がなされた。

まず、これからの大学は達成目標を定め、そのために必要なシステムを構築し、意識改革をして

取り組んでいかなければならないとして、主に以下の観点から説明、提案がなされた。

#### 1) 日本の大学教育力

シラバス、授業評価、セメスター制は近年、ほとんどの大学（85%以上）が採用しているが、日本は世界の中での大学教育力は最下位に近く、学生の質もあがったとは言えない。それらを導入する理由を含め、見直しが必要である。

#### 2) 授業評価の性質

調査により以下の傾向が明らかにされた。

- ・学生の成績、在学年数、学問的能力と授業評価は無関係。
- ・担当科目、年度が変わっても安定。
- ・文系教員よりも物理科学系の教員が低く評価される。
- ・研究能力（論文数）と授業評価は無関係。
- ・年齢と共に評価が低くなる。
- ・30名以上のクラスの集団としての意見や結果は信頼度が高い。

また、授業評価において、「話し方」「板書の仕方」「授業への参加」という項目が大きく総合評価に影響を及ぼすことが明らかとなったことから、授業評価をあげるためにはその3点の見直しが有効であることが示された。更に、高知工科大学の学生の主観を聞く（例：この科目あるいはその関連科目が好きになりましたか）評価項目例が示され、評価項目の問い方の見直しが提案された。

#### 3) FDは何のために導入するのか

FDは具体的な教育（授業）目標を達成するためにあり、教育改革の前にまず目標設定が必要である。以下、決定すべき事項として説明がなされた。

第一：「何を実現したいのか」具体的目標の設置）例：単位の充実による問題発見・解決型の人材の育成。

第二：「行動目的を何にするか」（共通認識の決定）例：単位の充実。

第三：「目的達成を何で測定するのか」（評価指標の決定）例：単位の充実度は単位制度の由来である一日の学修時間によって測定。

第四：「評価基準」評価基準は達成目的の高さ、世間が認める結果を考慮して決定。

#### 4) 単位制について

1単位とは45時間相当の学修内容とすることであり、教室外の30時間を学生に学修させることである。しかし調査の結果、学生の平均学修時

間の実状は授業時間を含めて1日2時間59分であり、授業外の勉強時間が極端に少ないことが示された。単位制は学生に勉強させるために導入すべきものであることを再認識する必要性と、そのための具体的な改善策として、シラバスに、教室外の学生の義務や、授業外学習の仕方、また学生の努力指針（どうすれば良い成績がとれるのか）を記すというシラバスの有効活用が提案された。

#### 4) GPA制度について

GPA制度は大学卒業生の「学生の質」を保証するためのものであるべきである。導入する場合には、例えば2（B）以下だと卒業させないなどと規定し、低い場合には特別な指導をすべきであり、「横浜国大を卒業した学生はこのような学生である」という大学全体での目標をたてることが大切であるとの提言がなされた。

最後に、目的達成の鍵はシステム改革よりも意識改革であることが強調され、FDは人を育てるため、組織としての共通認識を持つためにあるべきものであり、組織として目標を持って導入すべきものであると話された。



(奥野)

## II. 「学生を育てる授業—アクティブラーニングの多様性」

京大高等教育研究開発推進センター（全国初の大学教育実践の研究センター）の溝上慎一先生から、主に以下の4点の観点からお話があった。

#### 1) 学生の学びを目標とする授業づくり

大学で学生が勉強することが学生の将来に本当に役立っているのかという観点から考えると、学生がどのように学んでいるかを考えること、学生が「理解する」とは何かを知ることが必要である。近年講義型授業が軽んじられ、学生参加型、プロジェクトが注目されているが、FDでは、テクニクに終始するのではなく、学生が何を学ん

でいるのかという観点が大切である。



## 2) FDについて

「これまでのFD」：一教師が教室の中でどうしたらいいのかについて論議。

「これからのFD」：組織全体での目標を設置すべきである。しかしそれを達成するのは一教員であることには変わりがない。

「授業公開」：授業公開をFDの1つとして実践しながらも、そこで議論されている観点（教師の話し方、板書の仕方、学生の受講態度などに議論が終始）の貧しさを指摘。

「学生による授業評価」：全般的に評価は高いが、「予習・復習」の時間が少ないという結果が毎年続いていることの検討の必要性を指摘。日本では、学生が授業外で勉強することが想定されておらず、知識を得て、授業外学習をして、議論することの重要性が説かれた。

## 3) 世界の動向

世界の大学では、知識基盤社会における高等教育の役割と責任が求められ、汎用的技能(Generic skills)の養成を重視している（例：リーダーシップ、分析思考力、対人理解力等）組織的な教育目標としてシラバスに明示化している例としてメルボルン大学のシラバスが紹介され、世界は「どのように学んでいるか」を重視する学習中心型教育へ転換されていることが報告された。

## 4) 学習力の観点から見た日本の大学教育の現状

日本の大学の低い汎用的技能の得点の原因の一つとして、進まない単位制の実質化が挙げられ、欧米型の講義+演習を一体化させた Semester 単位の活用も提案された。また日本の現状として、組織だって学生を育てていないこと、意識の高い学生達は自分で成長している現状が、調査結果をもとに、示された。

講演後、フロアからは、「授業外活動30時間

のフォローはどうすればいいのか。」「Generic skillsが低いことに関してどのように取り組めばいいのか」という質問が相次ぎ、今の段階では意識を変え「より」努力する必要性、学問を問わず取り組む必要性が再度強調された。

（奥野）

## III. 「修己治人の意識を育む IDEAL 授業」



東京工業大学の小田原修先生からは、講義のタイトルについて、まず大学での「知識」の取得は目的の一つにすぎず、大学では「教育を受ける」というより「道を探し求める」ことが重要であり、中国の書にある、「大学とは人を治める前にまずは自分を治める修己治人の志を育てるところであり、大を成すに小を軽んじてはいけないという中庸の心を育む場所である」という箇所が紹介された。次にその「修己治人」を育成するために、「IDEAL」を取り入れた授業を実践することが提起された。「IDEAL」とは、Identify(認知し)、Define(設定し)、Explore(探求し)、Act on(実践し)、Look back(共生する)という「起承転結」的な自律を導入する考え方である。その「IDEAL」プログラムを取り入れた日米科学技術宇宙応用プログラムや、大学研究室での高等教育プログラムが紹介され、特に高等教育では、専門の知識をアップさせながら、自分の人間性を高め、創造性に富む人材を輩出してゆく必要があるとして、個人の志向や資質に合わせた教育の必要性が説かれた。具体的には、人材を以下の4つに分類し、それぞれの資質にあった指導を行なうことによりどの分類の人材も伸びる可能性が示された。

A 独立的、訓練に抵抗的、広範な方法に開放的  
→自律性や発見に対し指導的

B 自己中心的、非評価的→持続的で興味ある対象で発現

C 思慮性が高く耐久的→興味対象への持続性と自己評価，反省の分岐的思考の向上により発現

D 思慮が欠け場当たりの→Cをより知覚的に指導することにより可能性が発現

最後に大学院教育を中心に，これまでの経験を通して，教育には「創意・創造・創発」が大切であるというご自身の教育哲学が話された。

(奥野)

#### IV. 「米国における教育経験から見た良い授業とは」

横浜国大工学研究院教授で前米国テキサス工科大学教授の石原修先生からは，自身の米国での教育経験から見て「良い授業とは何か」についてお話があった。

テネシー大学での大学院生活とその当時の恩師とつい最近，音信があった話，その後の7年間にわたるカナダでの研究生活，さらに1985年にテキサスに移り88年にテニユアを獲得するまでのお話は，それ自体が良い授業・良い教育を考えさせる生きた教材であった。



続いて自身の経験を交えて，「TAを通じてよい授業を考える」をテーマに米国のTA制度，日本の現状についての話題が提供された。米国のTA制度については，

- (1) 単独で授業担当やシラバス作成を行うなど，日本に比べて従事する業務が一層高度かつ広範であり，1960年以降量的に拡大してきた。
- (2) さらに，70年代以降，TAの教育の質が問題となり，訓練・養成プログラムが本格化した。
- (3) 大学院教育の不可欠の一部ととらえている。
- (4) Graduate Assistantship の一つとしての地位，資格，報酬を認められるものである。

などが紹介された。

「テキサスでの経験－昇任，テニユア審査」については，

- (1) 教育研究貢献度の評価は，” Teaching ” ， “ Research and Creative Activity ” ， “ Professional Service ” の3項目で行われる。
- (2) 「実効性」 ， 「最新の専門知識の伝授」 ， 「講義を通しての学生の成長」 ， が重視される。
- (3) 学生の授業評価は，「質はどうか」 ， 「自分の役に立ったか」 ， 「他の学生に教員の評価をどう伝えるか」 の3項目のみである。
- (4) 教育・研究貢献評価基礎資料については，「教員の自己評価書→主任との面談→主任による評価→主任の評価を教員が閲覧・署名→主任の署名→学部長に提出」の流れである。

などが紹介された。

最後に，読売新聞「教師力」の連載記事の紹介があり，「良い授業」について，

- (1) 「学生による評価」 ， 「同僚による評価」 「授業のポートフォリオ」 で良い授業を評価する。
- (2) Discussion Session をリードするような米国型TAの導入。
- (3) 他の教員が自由に授業をのぞける雰囲気作り。

が提案された。結論として，「教員は学生の個性に合った教授法を開発すべきであること」が強調された。

(君嶋)

#### V. 「次世代型大学の良い授業－ナレッジマネジメントと参画教育の視点から」



日本教育大学院大学教授で前横浜国立大学教授の林義樹先生から，標記主題のもと「参画理論と

ラベルワーク入門」についての講演があった。大要は、

- (1) ITの進展により、だれでも、いつでも、どこでも知の創造と伝承による学びの条件が整っている。教育の役割は、万人に知識創造を保障することである。
- (2) 創造とは、その時点まで、その個人・グループ・集団・組織・社会・世界が考えなかった・行わなかった・実現しなかったことを考える・行う・実現することである。
- (3) 文章や図などで表現できる形式知だけでなく、形式化が困難・不能な暗黙知に注目することが大切である。また個としての知だけでなく、集団の知にも注目すべきである。
- (4) 学びとは自己の知を広め・深め・高めて更新することである。

という学びの意味に始まり、学びの場（学場）のモードが [ 参集（知識の増加） → 参与・参加（認識の形成） → 参画（意識の変革） ] と高まっていくものとし、学習者に何を獲得させるかで、学場のモードを使い分ける必要が強調された。

林先生の講演の後、その内容について参加者全員による「ラベルトーク」が実施された。最初は多少戸惑いながらも、各人の率直な感想をラベルのコメントで確認した上での討論は、次第に熱を帯びるものとなっていった。



「ラベルトーク」に引き続き、さらに林ゼミより2件の報告があった。

客員学生の澁谷貞子氏（前桐生短期大学看護学科・成人看護学教授）より、「成人看護学方法I（講義）でのラベルの活用」が報告された。内容は、「講義の最後にラベルを書き、グループごとにラベル新聞を作成することで、学生にとっては授業の振り返り、教師にとっては授業の評価ができた。グループ発表に対してはコメントラベルを

書き、発表を真剣に聞くこと、他者を評価するという訓練に役立った。また文章を書くことで日本語の学習に役立った。」というものであった。

現職が河合塾COSMOコース・城南予備校世界史講師で修士課程1年在学中の平松健氏からは、「予備校での参画理論の実践-現在の様子と今後の展開-」と題して、「一方通行の授業が実施されている予備校で、参画理論を用いることによって生徒たちが積極的に学びに参加するようになり、新しい学びの場が創造できた。」というコメントがあった。

（君嶋）

## 討論会

討論会では、FD活動、大学の授業についての議論を行った。近年、多くの大学はFD活動に積極的に取り組んでいるが、多くの課題があり、また活動に対しても多様な意見がある。今回の討論会はフリーディスカッションとし、FD活動や授業改善について意見交換を行った。主な議論は以下の通りである。

### (1) FD活動について

- FD活動は授業改善であると考えている人が多いが、活動の目的は学生に勉学意欲を持たせ、教育効果を高めることである。
- FDの目標設定が重要である。また目標はうたい文句ではなく、実現目標として成果を上げている大学がある。
- FD活動の多くは、アメリカの制度を導入しているが、日本とアメリカでは学生のモチベーション、教員の採用基準、社会的環境などが異なるので、日本の国状に応じたFD活動を考える必要がある。
- GPA、キャップ制など単位の実質化を前提とした制度が導入されているが、現実には単位の実質化とは大きなギャップがあるため、これらの制度の導入は現場の混乱を招いている。
- FDは本当に必要なのか。FDの理念が必要である。

### (2) 授業評価

- 横浜国立大学の授業アンケートは質問項目が多すぎるのではないか。
- 授業評価の目的を明確にすべきである。目的が授業改善か教員評価かで質問項目は変わる。
- 授業評価のデータを蓄積するためには、授業評価のアンケートの内容をあまり変えるべきではない。

- ・日本の場合、授業評価の結果と学生の成績や学問的能力とは無関係である。アメリカの調査報告では、授業評価と学生の学習や到達度の間にゆるい相関がある。
- ・学生の授業評価には問題点が多い。たとえば、単位の実質化のために宿題を与えると授業評価は悪くなる。すなわち、学生が負担を感じる授業の評価は悪い。



### (3) 授業改善

- ・良い授業とは、単に声の大きいとか字が上手で板書がわかりやすいということではなく、学生が後になって良い授業であったと思う授業である。
- ・合宿研修などにおいて、良い授業のためのスキルを教育すればよい。
- ・自分の講義のビデオを見ることは授業改善に非常に有効である。
- ・授業の目標を設定する。学生のためになる授業を考える必要がある。
- ・学生の創造性を育む授業を考える。
- ・大学の教員は教育の訓練を受けていないことが問題である。

### (4) 授業公開

- ・アメリカでは、教員が他の教員の授業を気楽に聴きにいき、質問などを行っている。横浜国立大学でもそのような環境の整備や雰囲気醸成が必要ではないか。
- ・授業公開を強制することは賛成できない。
- ・東海大学の例では、2年間公募した結果20%が応募した。その後は授業公開は強制とした。

### (5) TAについて

- ・大学の教員は教育と研究が主要な業務であり、現状の教員数では単位の実質化を厳密に行うことは不可能であり、TAを有効に活用する必要がある。
- ・アメリカでは、TAは重要な教育と位置付けられており、TAにもグレードがあり、上級のTAは教授と同じように授業をすることができる。そのため、TAになることは大学院生の誇りであり、自分のキャリアにもなる。一方、日

本の場合、TAは先生のお手伝いという位置づけであり、教員が学生にお願いしてTAになって貰っているようなこともある。TA制度について検討する必要があるのではないか。

(小川)

### 参加者の感想から

- ・良い授業とは何かということ深く考えさせられた。学生の創造性をのばす授業とはどうあるべきかという点について、TAの活用の重要性との関連として捉えることができた。教員の昇進等の点で教育の良し悪しを評価する考えをもてた。
- ・FDの必要性を個人の授業にだけ焦点をあてずに組織的、制度的なことが解かりやすく講演されて良かった。
- ・FDの目指すところの意味を誤解していましたが、今回、理解することができた。他大学等におけるFDの取組み事例を知ることで、横国大を客観的に見るができるように思えたことが良かった。



FD推進部門 研修・シンポジウムWG

主査 小川輝繁 (環境情報研究院)  
君嶋義英 (工学研究院・兼務教員)  
本藤祐樹 (環境情報研究院)  
奥野由紀子 (留学生センター)



## 愛媛大学「FDスキルアップ講座」参加報告

工学研究院 技術職員 長谷川紀幸

### 愛媛大学「FDスキルアップ講座」

前号の拙稿においても簡単に紹介しましたが愛媛大学では教育の質の向上を目指す取組として「FD/SD/TAD三位一体型能力開発」を実施しております。この取り組みでは愛媛大学の理念と目標を教員・事務職員・TAが共有し、一体となって能力開発に取り組んでおり、その取り組みは高く評価されて特色GPにも採択されております。(http://www.ehime-u.ac.jp/pickup/coe/gp.html)

FD/SD/TADを連携させながら実施している能力開発プログラムは系統性のあるプログラムとなっており、参加者がプログラムを通じて継続的な能力開発ができるように5段階のレベルに分かれた内容構成になっております。

レベル	FD	SD	TAD
レベルⅠ 【導入】	新任教職員研修オリエンテーション		TA研修(共通教育) TA研修(専門教育)
	FD/SDセミナー		
	教育改善のための学生とのワークショップ		
レベルⅡ 【基本習得】	教育ワークショップ	新人研修プログラム 経過マナー研修	TAワークショップ
	FDスキルアップ講座		
レベルⅢ 【応用・発展】	授業コンサルティング・サービス 公開授業	中堅職員研修 (プロジェクト研修) SDスキルアップ講座	スタディ・ヘルプ・ デスク実習
レベルⅣ 【応用・発展】	教育実践 シンポジウム発表	教育学生支援部 タスクフォース	
	大学教育実践ジャーナル投稿		
レベルⅤ 【支援・指導】	教育ワークショップ講師 FDスキルアップ講座講師 授業コンサルティング ファカルティデベロップメント	SDスキルアップ 講座講師	TAコーディネーター 研修

(愛媛大学FD/TADガイドブックより)

私が参加した「FDスキルアップ講座」は上記レベルIIに位置づけられており、基本的スキルの習得として全15種類もの多様な講座が用意されており、その中の「FDフィードバック講座」に今回、参加してまいりました。「FDフィードバック講座」は前号で報告しました大学コンソーシアム京都での講演において紹介されていた愛媛大学で実施している特長的なFD手法としてのMSF(Midterm Student Feedback:中間期の振り返り)のエッセンスと思われるためであり、この講座によってMSFによるFDを体験することを考えました。

### 「FDフィードバック講座」内容

講座の内容構成は以下の通りでした。

- (1) 参加者自己紹介
- (2) 簡単なレクチャー
- (3) 参加者ミニ授業実施
- (4) 参加者全員からのコメントによる授業実施者へのフィードバック

まず、参加者全員がそれぞれ自己紹介。今回の講座では教員の立場としての参加者が私を含めて2名でした。非常に少ないと思われるかもしれませんが結果的には少人数で実施することによって効果が高くなったと思われました。2名の講師の他、コメントによるフィードバックを行う受講者として講座を企画担当する部署の職員が数名参加しております。自己紹介はグループワークの基本ではありますが、ここでは学生に授業を行う立場として、以下のことに注意して自己紹介を行いました。

- (1) 自分がなにものであるかを明らかにする  
→話の内容にふさわしい人間かどうか
- (2) 話す者のことを受講生に覚えてもらう  
→無関係の人からの話ではなくなる
- (3) 受講生に提供できる情報を盛り込む  
→受講生の関心を引き出す

これらのことは一般のセミナーなどの講師がそのセミナーを成功させるために必要とされる工夫と同じものですが、学生にとって授業に向かう姿勢や関心を生むことに対しても同様のことが必要であるかと思われまます。

簡単なレクチャーではカークパトリックモデルの「教育研修効果測定における4つの指標」により、授業においてもi)満足度、ii)到達度、iii)活用度、iv)成果/業績を尺度として念頭に置いて授業を計画・実施することの必要性が述べられました。

### フィードバックFD

さて、いよいよミニ授業の実施とフィードバックのグループワークです。ミニ授業の前に「プレゼンテーション・評価シート」が配布されます。シート

のコメントは授業者に対する感謝のメッセージとしてその授業の中でよかった点をたくさん見つけて書く、アドバイスはその授業で「さらにこうすれば、もっと良くなると思う点」を記述します。

私は技術職員ですので教壇に立つことはもちろん、学生に講義をした経験もないのですが、演習補助をしている授業を題材に5分間のミニ授業を実施しました。ミニ授業の様子は担当の職員がビデオカメラによる撮影も行われます。

ミニ授業を実施する教員以外の参加者はすべて受講生として講義を聴き、講義終了後に全員が寄せ集まってグループワークとなります。ミニ授業の前に配布された「プレゼンテーション・評価シート」に基づいてコメントとアドバイスをしますが、前述の観点によるコメントとアドバイスは自分の授業に自信を持つことができると同時に、アドバイスによって自分の授業を振り返ることにより、改善点を自分で明瞭に捉え返すことができるようになります。

また、今、撮影した自分の授業を見せながらアドバイスされるので、「ここで説明している本人は頭の中に『図』を描いていたようだから、その『図』があったら、学生にはもっとわかりやすいですよ」というアドバイスをいただくと、今まで伝えなかったのに、なかなか伝えられなかった自分の話し方などに気づいて大変参考になります。

撮影された自分の授業を再度、目にすることは非常に恥ずかしいものでもありましたが、しかし、恥ずかしがらずに直視することによって、自分の授業を客観的に捉えられることになり、そうしたビデオ撮影がなくとも自分の授業を客観視ができるようになる能力を身につけることは「授業改善」には非常に重要であることも体験いたしました。

### 最後に

今回は愛媛大学の非常に優れた能力開発プログラムに参加することにより現場で必要とされる効果的なFDの手法を体験することができました。

今後は今回体験した「授業を受ける学生から授業を行う先生へのフィードバック」を実際に先生方のご協力を得て試行することができればと思います。さらに「授業を行う先生から、授業を受ける学生へのフィードバック」による学習者の積極性や学習効果の向上などの可能性を探ることができればとも思います。

最後に、「FDスキルアップ」講座への学外からの参加を快くお受けいただきました、愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室 副室長 准教授 佐藤浩章先生と砂田寛雅教育学生支援部職員並びに徳永平太郎教育学生支援部長、猿渡仁教育学生支援部教育センター長の皆様方に深く感謝いたします。

FD講座で使用されたミニ授業の評価シート

プレゼンテーション・評価シート						
発表者名	5	4	3	2	1	
1 話の構成						
2 話の内容						
3 意見の明確さ						
4 声の大きさ						
5 話す速さ						
6 声の明瞭さ						
7 間の取り方・リズム等						
8 顔の表情						
9 視線の向け方						
10 身振り等						
総合						
コメント(よかった点についてお書き下さい)						
・一年勉強に頑張った姿勢が伝わってきた。 ・レジュメがしっかり作られている。						
アドバイス(更にこうすれば、もっとよくなると思う点をお書き下さい)						
・資料にナンバリングをした方がよい。 ・図式化が必要。						
評価者名 ■■■■ さん						

プレゼンテーション・評価シート						
発表者名	5	4	3	2	1	
1 話の構成						
2 話の内容						
3 意見の明確さ						
4 声の大きさ						
5 話す速さ						
6 声の明瞭さ						
7 間の取り方・リズム等						
8 顔の表情						
9 視線の向け方						
10 身振り等						
総合						
コメント(よかった点についてお書き下さい)						
声がとても上手に聞こえていて聞き取りやすかったです。また身振りも豊かであったと思います。						
アドバイス(更にこうすれば、もっとよくなると思う点をお書き下さい)						
資料がきちんとした形で用意されていたのはいいと思いますが、すべてが書かれてあると学生にとっては緊張感がなくなるので、例えば大事なところを空欄にしておけばどうでしょうか。						
評価者名 ■■■■ さん						

速 報

平成19年度前期授業評価アンケート実施報告

FD推進部門長・杉村秀幸

全学的な授業評価アンケート実施までの経緯

本学では、平成14年度から全ての教養教育科目について学生による授業評価を実施してきた。専門教育科目については、各学部任されていたが、平成17年の後期より、全教養教育科目と各学部の専門教育科目について、質問項目を統一したアンケートとして全学的に実施されている。そして、平成18年度の前期に若干の設問項目の見直しと4段階評価に変更し現在に至っている。

授業評価アンケートの目的

FD推進部で実施している授業評価アンケートの目的は、授業改善のために教員が利用することを原則としている。しかしながら、全学的な統一アンケート実施以前から、工学部では専門教育科目において、独自のアンケートを実施しており、その質問項目のいくつかを教員評価に利用していた。このような経緯から、アンケートの統一にあたっては、工学部の事情も留意し、一部質問項目は工学部で従来通りの教員評価に利用できるようにしている。しかし、これは工学部開講科目のみでのことであり、その他の学部開講する教養教育科目および専門教育科目では、そのような目的での利用はされていない。アンケートの質問項目について、あらためて確認しておく。まず、学生自身の授業に対する受講態度に関する質問として、Q1からQ3までを設定し、次に教員の実際の授業の進め方や内容についてQ4からQ13までを設定し、最後に総合評価としてQ14からQ16が質問されている。

平成19年度前期の実施状況

平成19年度前期の学生による授業評価アンケートは、7月9日から23日の間に実施され、教員に対する配布授業数は、教養教育科目で517件、専門教育科目では、教育人間科学部284件、経済学部20件、経営学部75件、工学部374件であっ

学生による授業評価アンケートの質問項目

【受講態度について】

- Q1 この授業を選んだ動機は何ですか。以下の中からいくつでも選んでください。
1. シラバス(講義概要)を読んで面白そうだったから
  2. 他の人に薦められたから
  3. 個人成績を上げるため
  4. 必修だから
  5. たまたま時間が空いていたから
- Q2 この授業の欠席回数は。
- Q3 この授業のための「時間外学修」をしましたか。

【授業の進め方および内容について】

- Q4 板書や資料提示・デモンストレーション等は良かったですか。
- Q5 授業の理解に役立つ教科書・参考資料・資料などが用意されましたか。
- Q6 シラバスの記述は、分かりやすかったですか。
- Q7 シラバスに示された内容に従って(沿って)いましたか。
- Q8 教員は他の学生の迷惑となる行為が行われないう、注意を払いましたか。
- Q9 教員は質問やコメントなど、学生の声を聞く機会を設けましたか。
- Q10 教員が授業に対し、意欲的に臨んでいたと思いますか。
- Q11 授業の進め方や教材などに教員の工夫が感じられましたか。
- Q12 授業内容についてどの程度理解できましたか。
- Q13 この授業で考え方・知識・技術などが向上したと思いますか。

【総合評価】

- Q14 授業をとおして、学問領域への興味や関心が喚起されましたか。
- Q15 人間や文化、社会、歴史あるいは自然などについて、見方や洞察力が高まり、役に立ったと思いますか。
- Q16 総合的にこの授業に満足しましたか。

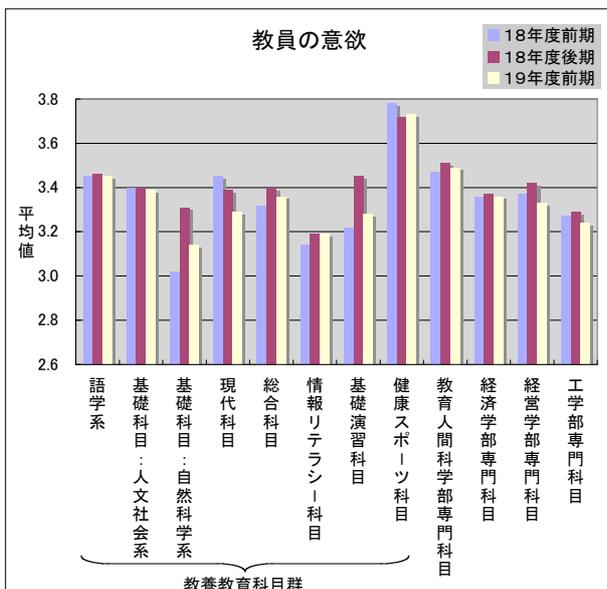
た（夜間主，2部関係の授業も含む）。そのうち、回収率は、教養教育科目では86%，専門教育科目では教育人間科学部74%，経済学部90%，経営学部92%，工学部84%であった。学生の側から見た、延べ回答人数は、教養教育科目が18,240名、専門科目では、教育人間科学部が5,499名、経済学部が938名、経営学部が4,517名、工学部が13,312名であった。

### 科目別による比較分析

先のアンケートの目的の項でも述べたように、その利用目的はあくまでも教員自身による授業改善の手がかりとするためであり、それぞれの担当教員に授業ごとの集計結果を返却し、それをもとに授業改善計画書が提出されている（任意）。本稿では、初の試みとして、科目ごとに本学の学生がどのような印象を持っているかを授業評価の平均値として示すことによって、大学全体としての今後の授業の改善の方向が示されるのではないかと考え、以下の三つの観点についてグラフを作成した。なお、今回は夜間主，2部の授業科目については、除外している。

### 教員の授業に対する意欲

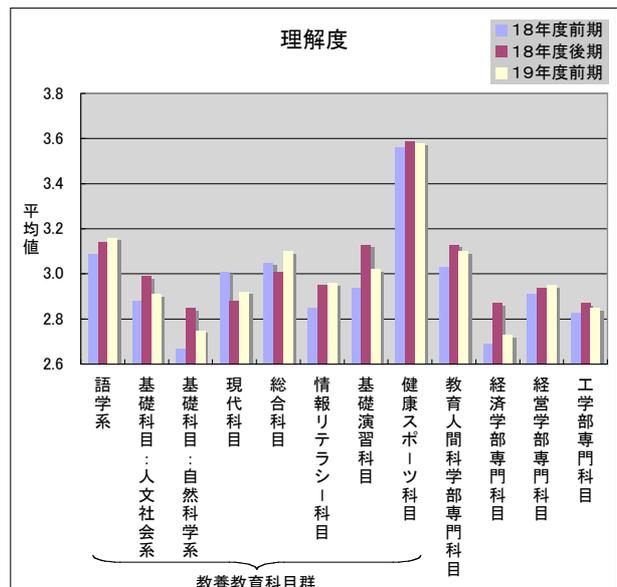
アンケート項目のQ10について、科目ごとに学生の評価の平均値を算出したものが次のグラフである。4段階評価で、4が「非常にそう思う」3が「ややそう思う」という回答であるので、平均値が「3.0」以上であれば、おおむね良い評価が得られていると言えよう。いずれの科目においても3.0を上回っており、本学の教員の授業に対する意欲に関しては学生から良い評価を得ていると言ってよ



い。ただし、基礎科目の自然科学系の前期の授業に関しては、他の授業と比較して評価が若干低くなっていることは気になるところである。

### 授業内容の理解度

次に、Q12にある学生の授業の理解度について、同様に平均値を算出した。ここでは、平均値はいずれも低くなっている。特に、教養教育の基礎科目、現代科目、情報リテラシー科目、経済学部、経営学部、工学部の専門科目では「3.0」を下回っており、受講している学生が講義の内容を難しいと感じていることが窺える。「授業内容を易しくすべき」などということをお願いするつもりはさらさらでないが、「学生に分かり易く教える工夫は常に必要」ではないだろうか？かく言う筆者自身のアンケート結果でも、理解度に関しては厳しい評価を受けることもあり、これは自戒を込めたメッセージである。

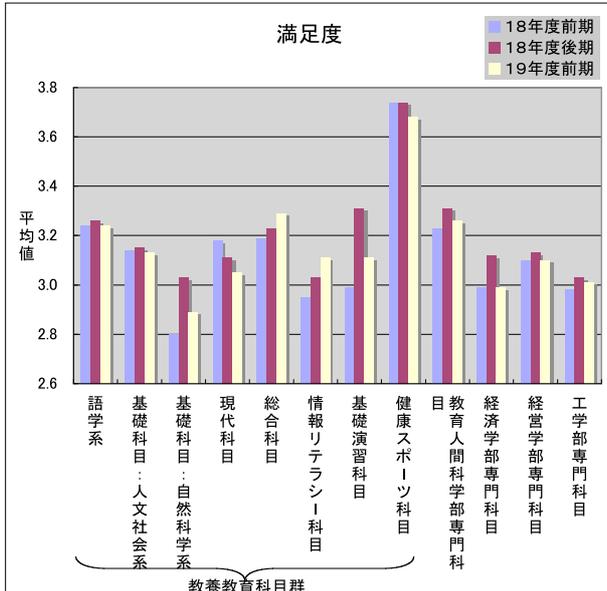


### 総合的な満足度

最後に、アンケートのQ16にある「総合的にこの授業に満足しましたか」という設問から、学生の科目ごとの満足度を算出した。基礎科目の自然科学系の前期の授業科目が「3.0」に届いていないが、それ以外の科目については、ほぼ学生の満足が得られているという結果であった。

自然科学系基礎科目の前期の授業の満足度が低い要因についてはさらに詳細な調査が必要であろうが、先の教員の意欲に対する評価と無関係ではないだろう。授業の内容が難しいと感じている他の科目では、総合的な満足度は低いとは言えない。該当す

る授業を担当されている先生方には、これを機にご自分の授業評価アンケート結果を今一度ご覧になり、来年度の授業に際して授業内容を再考いただければ幸いです。



全体を通して、教養教育科目群の健康スポーツ科目が、いずれの観点からも高い評価を受けていることが目をひく。これは、この授業科目の内容の特殊

性にもよるのだろうが、必ずしもそれだけではないという気がする。他の授業科目の担当者にも参考になるような秘訣があるのかも知れない。機会があれば授業担当者や受講生にインタビューし、他の教員にも参考になるような情報があれば、あらためて報告したい。

## おわりに

従来、授業評価アンケート結果に関しては、授業ごとにQ3からQ16までの項目の平均値とその科目全体の平均値、それらをレーダーチャートにしたものを担当教員に配布してきた。これらは、個々の担当教員には授業改善のための手がかりとして活用されているものであるが、大学や各学部が提供している科目群全体に対する学生の評価という視点では活用されていなかったように思う。今回、教養教育科目群と各学部の専門科目について、三つの視点「教員の意欲」、「学生の理解度」、「学生の満足度」から集計結果をグラフで表すことを試みた。「教員の意欲」と「満足度」では、ほとんどの科目で良い評価を得ていることが窺えたが、「理解度」では学生が難しいと感じている科目が浮き彫りにされた。今後も項目を変えて、このような科目別の集計結果を順次提供していきたいと考えている。本稿に関して、ご意見を戴ければ幸いです。

### 「授業改善計画書」提出のお願い

前期の授業に対して実施した「学生による授業評価アンケート」の集計結果は、すでに各担当教員に配布しております。これをもとに、教員の皆様の授業に対する自己評価、改善すべき点、意見等をお寄せいただきますよう、お願いいたします。提出書類のフォーマットは、大学教育総合センターのHPからダウンロードできます。〔提出期限：11月16日（金）〕

提出された計画書は、後期分とまとめて、冊子「授業改善に向けて」として全教員に配布いたします。本冊子の一層の充実のためにも、一人でも多くの教員の皆様からのご協力をお願いいたします。

大学教育総合センター ホームページ

<http://www.yec.ynu.ac.jp/>

### 『わたしの工夫』欄 原稿募集中！

FDニュースレターでは、教員の皆さんからの授業におけるちょっとした工夫や学生の注意を惹き付けるコツなどを募集しています。掲載にあたっては記名／匿名のどちらでも結構です。詳しくはメールで下記まで。

教務課大学教育係：[kyomu.kyoiku@nuc.ynu.ac.jp](mailto:kyomu.kyoiku@nuc.ynu.ac.jp)



## FD推進部より

### 編集後記

鈴木センター長から巻頭言をいただき、経済学部、工学部からのFD活動報告、さらには夏の暑い盛りに、少し涼しい八王子セミナーハウスでとり行われたFD合宿研修会の報告と、盛りだくさんの記事内容で第2号を発刊できたことは、喜びに耐えません。また、愛媛大学のFD講座報告に加えて、授業評価アンケート速報も、内容の充実に大いに貢献していただきました。

ところで、創刊号を含めて、ニュースレターの内容に、皆様どのような感想をお持ちでしょうか？WGとしては気になるところです。

学内では、キャリア教育を初めとして教育改革・改善の動きが止むことはありません。常に時宜に合ったFDニュースレターが望まれているものと考え、努力したいと存じます。皆様の一層のご協力をお願い申し上げます。

FDニュースレターWG（工学部兼務教員）  
君 嶋 義 英

### 行事日程

10月中旬～11月16日(金)

前期分授業改善計画書提出

11～12月 公開授業「特色のある授業」

今後の予定されているFD推進部の活動

- ・FDシンポジウム
- ・「学生による授業評価」アンケート後期分



本誌への原稿を募集しております。また、ご意見・ご感想をお寄せください。

FD at YNU ニュースレター No. 2

編集／横浜国立大学 大学教育総合センターFD推進部

作成担当：ニュースレター・ワーキング・グループ

事務担当：教務課大学教育係

問合せ先：[kyomu.kyoiku@nuc.ynu.ac.jp](mailto:kyomu.kyoiku@nuc.ynu.ac.jp)

発行／平成19年10月 発行